

第1回産学人材育成パートナーシップ情報処理分科会議事要旨

日 時：2007年11月15日（木）10:00～12:00

場 所：三田共用会議所

参加者：別添席図

本会合の趣旨・目的及びこれまでの政府の取組（文部科学省、経済産業省）の説明について資料3～5に基づいて事務局からの説明が行われ、これに続き、各委員による問題意識について資料6に基づきプレゼンテーションが行われた。その後の自由討議概要は以下の通り。

-自由討議-

【A委員】 IT人材の議論をする上で、グローバルな中で日本の強みはどこか、という議論が前提になる。上流部分のみ日本で行い、中下流については海外に出すという議論で本当によいのか。ハードとソフトの同時開発・すりあわせ等は日本の強みと考えるが、こうした日本の強みを踏まえながら戦略的な人材育成を行うべきではないか。そうすれば海外にも輸出できるようなソフトウェアを生み出す人材を育成でき、情報処理技術者も活性化される。

【B委員】 産業界に聞きたいのだが、中国、インドのプログラミングスキルは高く、それらに対抗するための人材育成を行うことは疑問である。世の中をドラスティックに変えるような技術を日本から出すことは難しいが、このことを避けては通れないだろう。一方、日本の強みである応用部分の出来るようなポテンシャル（適応力）の高い人材育成を行うべきで、そのためにも基礎をしっかりと身につけさせる必要がある。

【C委員】 中流、下流については海外で行い、アイデア等の上流部分のみ日本で行うというのは今や通用しない考え方ではないか。インドや中国でも優秀な人材がおり、当然、上流部分を担っていく志の高い人も多い。

開発プロセスの部分において欧米が進んでいるが、品質においては日本は欧米に比べて一桁違うほど高いものがある。ただし、今の日本のやり方では、今後の急激に拡大するソフトウェア開発をこなすには無理がある。日本の品質確保の取組みや柔軟性を活かしつつ、欧米のプロセスを取り入れていくべきである。大学の研究テーマとしてやって頂ければと思う。

【D委員】 最近、ITを職業としている者でもマシンリーダブルなコードも書けないものが多くいる。最低限、コンピュータの中身を知り、動かせる位の基礎能力が必要で

あり、せめて基本的なコードくらいは書けるようにしてほしい。その上での人材育成の議論だろう。大学に期待したい。

【B委員】 きちんとしたプログラムが書けること、コンピュータの動作原理を知っていること、といった基礎能力が必須であることについては同意見である。

【E委員】 当社は、ユーザなのでシステム開発はベンダに依頼するが、近年行ったシステム構築の際には、やり方を工夫した。上流部分の仕様検討は社内のみで行ったが、メンバーの中には営業からきて日の浅い者もいた。要件設計、開発はITベンダ、最終的なチェックはITベンダと社内の者が一緒に行った。開発のうち、凡そ半分は中国で行った。

【F委員】 ITの中で日本の強みはナレッジ、応用技術の蓄積かと思う。中国、インドについては、日本のような蓄積はないので、うまく活用していくことが課題。

【阿草座長】 IT人材に求める人材像を明確にすることが大事。そのためにも産学でのすりあわせは大事で本分科会の枠組みは必要。とくにJ97では対象分野が1つであったのに、現在のJ07では5つの分野となり、その広がりも早い。J07については委員、特に産業界の委員から意見をいただきたい。

今回は本日の議論を整理した上で、再度議論をしたい。本日時間がなくて言い足りない意見などあれば、事務局までお願いする。

【八尋課長】 座長からも話があったが、J07に対するフィードバックを、是非産業界からお願いしたい。ただ委員の皆様には大変多忙かと思われるので、信頼される方を通じてでも結構なので、意見ををお願いしたい。

次回日程：2008年1月中下旬

次々回日程：2月中旬～3月上旬